

そして、神に至る

今朝与えられている聖書箇所をご一緒に聴いて、牧師はどんな御言葉を、この箇所から取り次ぐのだろうと思われた方、わたし自身もどう取り次ぐのだろうと考えながら1週間を過ごしました。この箇所には系図が述べられ、数えてみますと77人が登場しています。ただこういうふうには人名を並べて読み上げてみても、こう右から左に抜けてゆく感じですか。馴染みのない名前はなにかの呪文や符牒のようでもあり、耳に残りません。それはひとつには登場する人物の多くをわたしたちがよく知らないからです。ここに上げられている名前の多くは旧約聖書を読んでいてもそれほどエピソードのある人は多くありません。どちらかと言えば無名の人間に近い。しかし、ここは重要なポイントですが、歴史的な偉業を残した人間ではなくとも、そこにそのかけがえのない一人が生きることなくば、イエスさまの登場には至らなかったという事実です。系図の「系」という字は「糸」という字の上に「ノ」にあたるものがついていますが、この「ノ印」は「引き伸ばす」意味で、糸をつないで伸ばすことを意味する。「系」とはつなぐ、つながる意味を表す言葉です。このイエスの系図はイエスの血の繋がりを意味するものであり、有名無名の人物を含みますが、誰一人欠けることなく用いられて神様の御業が現されるに至ったことをまず覚えたく思います。どうしてもよい人間を創造されることはないということです。

系図というのは時間の地図のようなものです。ふつうの地図が空間の位置関係を示すものだとしたら、系図とは時間をさかのぼってわたしの居場所、ルーツを社会的に位置づける。そのような働きをするものです。じつは新約聖書はイエス・キリストのお言葉と働きを語るものですから系図はほぼイエスのもの

だけですが、旧約聖書には系図がたくさん出てきます。民族のルーツを語るためです。特にイスラエルの場合、北王国はアッシリアに、南王国は新バビロニアにと次々と滅ぼされ、70年近くを捕囚に連れて行かれ、エルサレムに帰還する歴史を経ていますので自分たちの存在を確かにするためにも構成員を数えて名前を記したり、系図を載せている箇所が多いのです。系図とは、人の由来を、存在の意味を、過去に遡って解き明かす働きをするものです。

さて新約聖書にイエスさまの系図はふたつあります。有名なのは新約聖書の1ページにあるマタイによる福音書第1章1節以下の「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図」というものです。ふたつの違いは、アブラハムから降ってイエスまで至るのがマタイ、イエスから遡ってアブラハムも超えて最初の間人アダムに遡り、そして神に至ると記すのがルカです。見逃せないのはおよそ30歳から活動を始められたという情報と、「イエスはヨセフの子とされていた」という前置きです。すでに聖霊によって身ごもるという受胎告知を1章で述べていますので、読者は生物学的な父がヨセフではない事情を知っているわけですが、世間一般には、ナザレのイエスの父親はヨセフであると認識されていたと記すのです。

さて、この日本人には馴染みのないイスラエルの人々の名前が連ねられた系図には、「ダビデ王」や、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、主」と言い表されてきた族長を含んでいますから、イエスが正統なイスラエルの後継者であることを示す、そういう社会的位置づけを与える役割があります。しかし、民族的、血縁的にイスラエルとの連続性を持たないわたしたちはこの系図をどう受けとめたらよいのか、今週、わたしが祈っていたのはその答えを求めてのことでした。特にユダヤ人

向けに、ナザレのイエスこそが神の民イスラエルが待ち望んできたメシアであることを証するために福音書を書いたマタイと違って、ユダヤ人ではない地中海に住むすべての人々に、ここにあなたがたのための救い主がお生まれになったということを証しようとしたルカ、その射程には当然わたしたちも含まれている筈です。ユダヤ人だけではなく、異邦人であったすべてのひとのために十字架にかかれたイエスがキリストであることをルカは解き明かそうとして福音書を書いたからです。そう思って読み返しますと、先ほどの「イエスはヨセフの子とされていた」と記したことが重大な意味を持ってまいります。聖霊によって身ごもったイエスは、当時絶対であり、いまでも根強い地縁や血縁という人間を区別する枠組みから自由な存在であることを主張しているからです。それは生まれ故郷と父の家を離れて、旅立つことを命じられたイスラエルの祖であり、信仰の父とうたわれるアブラハムにおいても示されているポイントです。神は「地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって祝福に入る」という約束をアブラムにお与えになりました。そのためにアブラハムは「生まれ故郷」すなわち土地のつながりと「父の家」こちらは血のつながり、この両者は多くの場合、結びついて非常に強い力となる。わたしたちが何者であるかを形作る根っこになる部分です。しかし、神は、アブラハムがすべての民の父となるために「多くの民の父」がアブラハムという名前の意味です。神様に会う以前、彼はアブラム「偉大な父」という名前でした。彼は、行く先も知らずに神の命令に従い、地縁と血縁から離脱して行ったことによって、天を故郷とする新しい生き方のモデルを作り出した人なのです。これは地上の歩みにしがみついてある特定の家族集団や地域集団の利益によって政治や経済が国レベルで動かされる現実を見ますときに、

信じることによって地縁や血縁や与えられている関係を乗り越え、主にある兄弟姉妹として組み替えていく力を持った教えであることを再認識したいと思うのです。「イエスはヨセフの子とされていた」という書き方は「イエスはヨセフの子とされていた」が、そうではないという意味を秘めています。それはアブラハムにも見られる狭い民族主義や地域主義にとらわれるものではない。すべての人を救うために起こされた存在としてイエスを指し示しています。だからこそ、福音書記者ルカは系図をアブラハムで止めるのではなく、さらに人類の始祖アダムまで遡ってゆきます。創世記は 12 章にアブラハムの旅立ちが置かれますが、その直前の 11 章までは原初史とよばれる聖書全体の序文にあたる箇所、神話的レベルの箇所です。11 章にはバベルの塔の出来事が記されていて、さいごに話の顛末、地上に散らされた諸民族の系図が記されてゆきます。そこに 12 章から主役となるアブラハムの名も最後に記されるのですが、その父であるテラから最初の間人アダムまで、なお 20 人をルカは遡り、そして神に至るといふひと言でイエスの系図を終えるのです。この箇所が、いまを生きるわたしたちに示すことがあるとしたら何でしょうか。わたしは自分のルーツを 4 代以上たどれません。父方の曾祖父の名前をあげられる程度です。皆さんあまり事情は変わらないのではないのでしょうか。わたしは教会員のお父さんやお母さんの葬儀のためにどこで誰から生まれたかということを確認することがあるのですが意外と皆さん出てこないですね。おばさんに聞いてみますみたいな答えが返ってきます。すでにわたしたちは系図を社会的に必要とするような段階ではないということでしょう。そういう時代にあつて、わたしはこのカタカナの羅列のようにも見えるルカ福音書の記すキリストの系図から、創造主へと帰る旅としての命を読み取

ることを許されました。特に、ルカが「そして、神に至る」と記したことに深い思いを与えられました。これはひとつにはナザレのイエスのルーツは神であることを示しています。それと同時にキリストに結ばれて生きる者とされた人々は誰でも信仰によって、民族や性別や社会的な関係をこえて、この神へと至る道筋へ招かれている。繋がれている、そのような信仰の道路標識として、わたしたちは地上に生きたこの人々の系図を受けとめて良い。いや受けとめなければならないと強く思わされたのです。というのは、現在のわたしたちは不安にとらわれ、うつむいているからです。流されまいと懸命にいまにしがみつこうとしている。顔をあげて見る方向といえば常に自分たちが流されていく下流の方向、死や、虚無や、戦争や、暮らしの不安などつねに大きな川の流れの先が滝壺に落ちてゆくような、抗いがたい流れに吞まれて運ばれてゆく先、そちらを見て怯えるか、もう見るのをやめて考えるのを止めて下を向いてしまう。それでも体は流れに運ばれてゆくわけです。福音書記者ルカが示すこの「イエスはヨセフの子とされていた」に始まり、「そして神に至る」と記された系図は、わたしたちに、神に帰る道筋を示します。うつむいて地上のさまざまな重力に囚われているわたしの思いや心を、上流に、わたしたちのルーツに向けさせます。神に至る、神に帰る命のつながりとして覚えることを教えるのです。わたしはこの系図にはすべての人間が含まれることが許されていると信じるものです。なぜならば、キリスト・イエスがわたしたちのために人となられた神だからです。神は霊であり、肉体をとってこの世にこられました。昔いまし、今いまし、永久にいます存在であるからです。ですから、すべての人の救いのために人となられたイエス・キリストは今も働き、神がこの世を完成させるまで働きつづけておられます。わ

わたしたちの歩みもここにつながれているのです。信仰をいただいたことによって、信仰によって神の民イスラエルに繋がれた新しい集団として、天の国籍を約束されたものとして生きてゆくことが許されている。それは神に帰る旅と言って良い。そのような歩みがキリスト・イエスと共に始まる。わたしたちの命は、初めから、創造主である神と、救い主であるキリストのひろく、ながく、ふかく、時のはじまりから時のおわり、つまり歴史の完成に至る御手のなかに統べ治められているのです。このことを覚えて、命の源に、霊である神のもとに帰る日々として、わたしたちの歩みを捉え直し、希望をもって歩みたく願います。

お祈りいたします。